

インフルエンザ重症化におけるクラリスロマイシンの治療効果の研究：Matrix Metalloprotease-9 の発現抑制と心・血管系への影響に関する研究

(はじめに)

14員環、15員環マクロライドが抗菌作用以外に、低濃度で生体側に働いて様々な「生体防御機能の亢進」作用を持つことが、他の抗生剤にはない特色として注目されている。しかも抗菌と生体防御という絶妙で合目的な2面性がこれらの薬剤を特色付けている。本研究では、マクロライド系抗生剤のクラリスロマイシンが抗炎症作用を示すと共に **Matrix Metalloprotease-9 の発現抑制効果を示すことを見出したので、その薬理効果を解析した。**

(試験結果)

Influenza virus A/PR/8/34 (H1N1)を用いたマウスインフルエンザ感染モデルを作成し心臓への影響を調査した。その結果、インフルエンザ感染後心筋炎が発生し、慢性心不全に移行することが確認された。急性期の心筋炎と慢性期の心不全において、**Matrix Metalloprotease-9 と Trypsin の発現が亢進することが確認され、クラリスロマイシンの経口投与による両酵素の発現の抑制傾向が確認された。**そこで、クラリスロマイシンの最適投与量、投与時期の検討を進め、同時に作用機序の解析を進めている。